

ちとせには真紅のバラをたてまつれ

葉川柚介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

願わくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月のころ

仏にはさくらの花をたてまつれ　わがのちの世を人とぶらはば

目次

ちとせには真紅のバラをたてまつれ	1
Q・黒崎ちとせがライブ直前に血を吐いていた。プロデューサーの 選択は？	9

ちとせには真紅のバラをたてまつれ

仏には桜の花をたてまつれ わがのちの世をひととぶらはば

とん、と一步地面に踏み出して、目の前に広がる景色があまりにも春めいていたせいか、黒埼ちとせの脳裏にその句が過る。

降りたつたのは公園の入り口。遊歩道の先には、温かく柔らかい春の日差しが集っているような薄紅色のトンネルが見える。それだけで、胸が弾む。

生きていることを示す鼓動が、とくんとくんと時を刻んでいく。

幼馴染、と一言で済ますには複雑な経緯のある白雪千夜とともにアイドルとなつてしばらく。

レッスンと仕事、営業とライブ。既にしていくつかのアイドルらしいこともして、思った通りだったこと、思った以上だったこと、思いもよらないことをたくさん味わった。

屋敷での生活もあれはあれでちとせの好みであったが、それとは全く違う今という時間もまた、決して嫌いではない。少々忙しいのが玉に瑕と言えなくもないが、そんなものは些細なことだ。

「——お嬢さま。なぜお嬢さまが荷物を？」

「プロデューサー、急に仕事の電話がかかってきちゃって。長引きそうだから私たちが先に始めてて、だって」

「……まったく、だからといってお嬢さまに荷物を持たせるなどと」

冴え冴えするほどの美貌は無表情によつて一層際立つもの。

ましてそれが、愛してやまない白雪千夜の、強く意識して取り繕ったものであるならなおのこと。腹の底に渦巻いているのは言葉通りの怒りなのか、それともせつかくの休みに花見に連れてきてくれたプロデューサーが自分たちそつちのけで仕事に駆り出されそうなことに拗ねているだけなのか。

ニコニコと笑うちとせに見られていることに気付いた千夜は、ちとせが持っていた弁当の包みを受け取り、肩をいからせて歩きだす。その耳が少し赤くなっていることにちとせが気付かないほど鈍いなど、

千夜でさえ思っていないだろうに。

「お弁当、全部食べてしまいましたよか」

「それもいいわね。千夜ちゃんの作ってくれたお花見弁当、楽しみだわー」

桜並木の下までの、ほんのわずかな散歩道。

風に運ばれ、散り始めた花びらが1枚、2枚。温かい日差しと、涼しい風。

友が作ってくれた料理を詰めた弁当箱に、もうすぐ急いで追い付いてくるだろうプロデューサー。

とても楽しい、花見になりそうだった。



「んー、卵焼きおいしい」

「恐縮です。……まあ、たくさんつまみぐいしてらしたので味は既に知っていると思いますが」

「でも、ここで千夜ちゃんと一緒に食べると一層おいしいわよ?」

新米とはいえ、アイドルは多忙の上、目立つ。

長時間の場所取りと宴会じみた花見などできょうはずもなく、手作りの弁当を持って繰り出し、公園のベンチでのピクニックが精々ではある。

だが、とても得難い時間だとちとせは思う。

美しい景色。大切な友。友の手料理に、この時間を作ってくれた魔法使い。

平日の昼下がりには公園と言えど人通りも少なく、満開の桜も、花咲き誇る枝を揺らすそよ風も、全てがちとせと千夜の物だった。

「……それにしても、遅い」

「なあに? プロデューサーのことが気になるの?」

「……………料理が冷めます」

「お弁当、詰める前にちゃんと冷ましてたわよね」

事務所には安部菜々という偉大な先輩アイドルがいるのだが、ふと

彼女のことを思い出す。

息をするように墓穴を掘っていく今の千夜とは関係ないが。関係ないが。

だが確かに、プロデューサーがここにいないのは惜しいとちとせも思う。

なんとすることはない公園の桜並木だというのに、今日はどうしたことかとてもとても美しい景色になっている。

春の陽射しは冬よりも柔らかく、風の具合が花びらがゆっくりゆっくりと舞い散っていく。

このまま、時が止まってしまえばいいのに。ちとせをして柄でもないことを思ってしまうほど、この瞬間は儂く、尊く、愛おしかった。

「……ん」

「千夜ちゃん、眠い？ 朝早くから、お弁当作ってくれてたし」

「いえ、大丈夫……です……」

まして、お腹がいっぱいになりつつある千夜がうつらうつらと船を漕いでいる。レア過ぎる。ファンなら伏して拝むだろう理想郷がここにはあった。

「無理しないでいいわ。』少し、おやすみなさい』」

「は、い……」

だからここはしつかりと寝かせてあげよう。こてん、とちとせの肩に千夜の頬が乗る。

昔からこうだった。千夜が望めば、言葉にすれば、大抵のことはかなう。

プロデューサーとの出会いを言い当てた、魔女のおばあちゃんが言っていた。

『願えば、叶う。そういう星の元に生きている。空気を吸って吐くことのように！ HBの鉛筆をベキツ！ とへし折る事と同じようにツできて当然と思うことですじゃ！』

……時々とんでもなくテンションの上がるおばあちゃんだったなあ、と思い出しながら、意識を今に引き戻す。

千夜ちゃんマジかわいいわー、と思いつながら春を満喫する少女、黒埼ちとせ。この春も、その先の夏も秋も冬も騒がしく楽しいものになりそうで、一度しか来ない今この季節の巡りを待ちわびる。

とはいえ、こうなつてしまつとちとせ一人。話す相手もおらず、少し寂しい。プロデューサーはまだ来ないかな、と思つて空を見上げるくらいしか、することがない。

視界一杯に広がる桜の海と、その隙間から垣間見える空の青。白い花卉に血が通つたかのような薄紅に映える、深く透き通つた青があまりにもきれいで。

「きれいな空ね、目に染みるわ」

思わず、涙がこぼれそうになる。

悲しいわけではない。幸せなだけだ。

友がいて、景色が綺麗で、毎日が楽しい。これ以上何を望むことがあるだろう。このまま春の陽射しに溶けて行つても悔いなどない。

遙か昔、桜を愛した歌人もこんな気分だったのだろうか。

ただ、一つの問題は。

「……」

千夜を起こさないように少しだけ体をよじつて、荷物の中から取り出したのはスケジュールを書いた手帳。アイドルになつてから用意したものだ。

ぱらりとめくれば、びつしりとは言えないまでもこれまでの仕事とこれからの予定が書いてある。

来週のレッスンは何度も通つたスタジオで。

新しい歌の収録は千夜と一緒に録ることが決まっている。

ライブは少し先のことだがつい浮かれて色付きのペンで書きこんだ。

城ヶ崎莉嘉がくれたシールが可愛らしく踊り、今度ユニットを組めたらいいという話をしたアイドルたちと来年のスケジュールに記しをつけたりもした。

まったく、そうそう終わる暇もないな、と苦笑がこぼれるのを止められない。

自分がこんなことをしているのか、こんな風になるとは思わなかったと、ちとせの胸中は複雑で。

だから、コツコツと響いてきたよく知る足音に、少しいたずらをしてやりたくなった。

「願わくは花の下にて春死なん」

ドキリ、とばかりに足音が唐突に止まった。

少しだけ、溜飲が下がった気がする。かつて自分は長くないと聞かせたあの人がどんな表情をしているのか、振り向きづらい状況にあることだけが少し残念だ。

そのきさらぎの望月のころ。

足音の主はそう続きを詠みながら、ちとせの隣へ立った。座ったまま見上げたれば、呆れたような困ったような、してやったりと言いたくなる顔。その顔が見たかった。この魔法使いは、からかい甲斐のあることと言ったらそれこそ千夜にも負けていないのだから。

「ごめんなさい、驚かせてしまったかしら。……でも、こんなに見事な桜を見ていると、そういう気分になるでしょう?」

1000年以上昔のこと。今と同じ景色を見ていたはずもなく、しかし驚くほどに心が寄り添うのだから不思議だ。

プロデューサーは、そんなちとせを嗜めることはしない。どんな反応をするかと思つて長くないだろうことを伝える以前も、あとも、むしろちとせの側が驚くほどに変わりがなかった。

ちとせを一人の人間として敬い、少女として尊重し、アイドルとして輝けるよう情け容赦なくレッスンとレッスンと仕事とライブとレッスンを叩き込んでくる。

ちとせがそれを心から楽しめると、知っているかのように。

ファンのに姿を、歌を、笑顔を刻み込むことが、ちとせにとって

の大切な旅路の一步一步となることを知っていたかのように。

本当に、悪い魔法使い。

クスリと笑う。

その震えのせいか、千夜がむずがるような声を出し、目覚めてしまった。

だが、そろそろいいだろう。春の昼間とはいえ外で寝続けてしまつては体に悪い。それに、ようやく待ちかねた相手も来たわけなのだし。

「ふあ……。……。……。なんですか、おまえ。遅いですよ」

「そう怒らないの、千夜ちゃん。ほら、プロデューサー。千夜ちゃんの作ってくれたお弁当、食べて食べて」

「違いますお嬢さま。私たちの包みに入らなかった分を別の容器に入れただけです」

「そうだったかしら。まあ、私たちには多すぎるからプロデューサーも、ね？」

途端、賑やかになる。

プロデューサーは笑顔でおかずを詰めた容器と箸を受け取り、千夜はむくれながらも口に合うだろうか、とそわそわしていて。

そんな二人が、こっそりとほくそ笑むちとせに気付くこともなく。

「？」

「……。なっ！ なあ!? ハート!?!」

「あらあら、ハート形の卵焼きなんて、かわいいわねえ」

プロデューサーが摘み上げたハート形卵焼きにめっちゃ慌てる千夜という、計画通りの可愛いものを見ることが、できた。

卵焼きというものは大体において楕円に近い形をしている。

なので、斜めに包丁を入れ、片方の向きをくるりと変えればそれだけでデコ弁の類に適した可愛いハートマークができあがる。

どのくらい簡単かといえば、普段は料理などしないちとせが、千夜の目を盗んでこっそり仕込むことができるくらいに、である。

「かつ、返せ！ 返しなさい！ それはその……そういうのじやないですから！」

「あらあらあら」

赤くなつて手を伸ばす千夜。しかし相手は百戦錬磨のプロデューサー。個性豊かな数多のアイドル達の奇行珍行にも動じずうなずく猛者である。ひよいひよいと踊るように身をかわし、ハートマークの卵焼きなんてものを作ってもらえた喜びにうっすら涙を浮かべ、それがまた千夜の心に燃え上がる羞恥の炎にガソリンとなつて火力を上げる。

あ、携帯電話を取り出して写真を撮り始めた。器用なことだ。

ちとせそつちのけで走り去っていく二人を眺めるのは、本当に楽しい。

もつともつと、この先も見たいなどと、柄にもないことを思つてしまうくらいに。

千夜は変わった。変わってくれた。これからも変わり続けてくれるだろう。

ちとせは、ただ終わることができればよかった。

だというのに、今はどうだ。うっかり自分まで、魔法使いによつて変えられてしまったようだ。

この魔法は、どうやら12時の鐘を聞いても解けてしまいそうにはない。

なにせ、変わってしまった自分を自覚してなお、楽しくて楽しくてたまらないのだから。

「……………ふふっ」

いつの間にか、だばだばと走つて戻ってきたプロデューサー。いまだ千夜に追いかけられ、ちとせとすれ違う、その時に。

「私をアイドルにした責任、取ってもらおうからね」

黒埼ちとせの心は、定まった。



黒埼ちとせ。

美貌と、歌と、ダンスと、演技。

炎のような激しさと、月光のような儂さを兼ね備えたアイドル。
決して長くはなかった活動期間を最高に輝いた、魔性の少女。

その引退ライブはなぜかライブビューイングのみで行われ、ファンに惜しまれながらも最高のパフォーマンスを披露して。

「ところで、あなたたちがこのライブを見ているとき、私はもう死んでいるの」

最後のMCで口にしたこの言葉をもって、その存在はファンの魂に永遠に刻まれたという。

Q. 黒埼ちとせがライブ直前に血を吐いていた。プロデューサーの選択は？

距離としてはさほどでもないのに、しかし荷物がふさぐ道行きと音の反響の具合と心理的な隔たりにより遠く、わあわあと歓声が聞こえてくる。

音楽はくぐもって腹の底に響くような振動として周囲に満ち、あわただしく駆け回るスタッフと無線の連絡、薄暗い照明の中で出番を待つ少女たちの緊張した面持ちがそこかしこに散らばる、世界で最もワクワクする場所。

ここは、ライブ会場の舞台袖。

アイドル達が歌い、踊り、観客たちを湧かせるその片隅。

そこはまさしく裏方の戦場で、つまりアイドル達のプロデューサーの居場所だった。



ライブは盛況のようだった。

育ててきたアイドル達の晴れ舞台はいつ見ても眩しい。客席の後ろから見る時もいいが、客席に向けて笑顔を振りまくアイドル達の横顔を舞台袖で見守るのはプロデューサーならではの。とてもとても尊い時間だった。

すでにライブが始まってしばらく。

ライブ参加アイドル全員での開幕曲に始まり、ソロやユニットでの曲数が重なるたびに歓声がボルテージを上げている。

高垣楓やニューージェネレーションは堂に入ったパフォーマンスを披露し、夢見りあむは歌詞をとどころ間違えていたが当人は最後まで気付いていなかったようだ。これはまた炎上するかもしれない。彼女らしく、実に素晴らしい。

さて、ここからは王道をあえて外し、ファンに驚きを楽しんでもら

う時間だ。

意外性のあるユニットや曲の組み合わせ。デビューしたばかりの新人アイドルのオンステージ。ライブはこういった奇策もあってこそ盛り上がるもの。ファンの語り草になるようなセトリストを組むことは、プロデューサーの力の見せどころ。

ライブはアイドル活動の集大成の一つ。

観客が喜び、アイドルが楽しむ。

スポットライトの外で震えていた少女がステージの上で思い切り輝き、忘我のままに戻ってきたあとに浮かべる嬉しそうな笑顔。それこそプロデューサー稼業の醍醐味だった。

しかし、ライブが始まってしまえばあとは準備のスタッフとアイドル自身の奮闘によって成されるもの。

プロデューサーの仕事はライブが始まる前に終わっていると断言している。

会場とスタッフの手配、アイドル達のレッスンや物販の企画。それらをこなしてきた疲労も心地よく、ライブの裏手でスタッフに指示を出す、緊張が強いアイドルに声をかけるなど、合間合間に隅々への目配りをしている。

そんなプロデューサーだからこそ、気付くことができる。

荷物に隠れて見えづらい位置。ふと目が行くことすら稀だろうそこに、不似合いなほど美しい黄金色の輝きが、かすかに見えた。

不安に駆られたアイドルがうずくまる。ライブ前ではよくある話だ。

そんなアイドルに声をかけ、心配を解きほぐすこともプロデューサーの務め。これまでも何度となく繰り返し返してきたこと。今日もそうして声をかけようとして。

「コホ、コホ……ゲホッ！」

「――！」

白い肌。金の長髪。美貌に煌めく瞳は紅。

誰が呼んだか吸血鬼の末裔という噂。

1年ほど前にデビューし、今日もこれからパフォーマンスを披露する予定のアイドル、黒埼ちとせ。

彼女がうずくまり、咳きこんで。

口を押えていたその手に、薄闇の中でなおべつとりと赤黒い。

血を吐く姿が、そこにあつた。



そう、長くない。

黒埼ちとせをアイドルにした当初に、白雪千夜を交えない場で彼女自身から聞かされた言葉だ。

確かに、体力は少なくレッスンも慎重に体調を見ながらが鉄則だった。

とはいえ、それを苦とする姿を見せたことはいままで一度もない。時に飄々と、時に神秘的に、アイドル生活を楽しんでいるように見えた。

……見えてしまっていた、ということなのだろう。

時に年齢不相応に達観しているようだったその様は、この期に及んで思えば大人びているというには老成が過ぎ、自身の命脈を悟っているからこそその穏やかさだったのではないかと、そう思わざるを得なかった。

ちとせはこちらに気付いている。

呆然としたように見開いた目も、すぐに苦笑の形に細められた。

いたずらを見つけた少女のようなその様は、いままさに血を吐いたとは思えないほどに無邪気で。

だからこそ、既に覚悟の上の道行きなのだと思います。十分だった。

大人として、プロデューサーとして。いやそれ以前に人として。取るべき道は決まっている。

今すぐちとせを安静にさせ、救急車を呼び、病院に担ぎ込む。

何を迷うことがあるう。プロデューサーとして、うら若き少女たちをアイドルとして舞台に引き上げるからには当然その責任も負うべきもので、それこそが職務。何を恥じることも、躊躇うこともありはしない。

「……ねえ、魔法使いさん」

そう、たとえちとせ本人がスーツの裾を、悲しくなるほど弱々しく掴んできても、丁寧に言い聞かせて彼女をベッドに横たえるべきなのだ。

べきなのに。

——美しい

そう思ってしまうのもまた、人として、プロデューサーとしての宿業なのかもしれない。

白い肌。金の長髪。美貌に煌めく瞳は紅。

肌は血の気が引いてなお冴え冴えと白く、埃の舞う薄闇の中でさえ輝くよう。

さらさらとこぼれる金糸の髪は月光のように柔らかく、見る者全てを惹きつける魔力を秘める。

不安に揺れる瞳の中に収められているのは、ルビーですら霞んで見える輝きの真紅。

本当に？

本当に、ちとせを休ませることが正しい選択なのか？

どろり、と湿った囁きが脳裏をよぎる。

長くない、とちとせは言った。

その言葉に嘘はないという、強い確信はもはや疑えない。

仮に今すぐ病院に担ぎ込んだとして、ちとせはあとどれだけちとせでいられるか。アイドルとして再び舞台に立つことができるか。

今日までをアイドルとして輝いてきた彼女が、最後に白く消毒液の匂いに満ちた病室で枯れることが、本当に正しい選択なのか。

アイドルのプロデューサーとは、ただ少女たちを慈しみ守護するだけの存在ではない。

その輝きを見出し、時に成長を促し、彼女たち自身の歩みの先にこそある美しいものへと続く道を示すものだ、自身に任じてきたのではなかったか。

「……」

衝動は一瞬。葛藤は瞬きの合間だけ。

ちとせと交わした視線は最後まで逸らされることはなく、プロデューサーとしての行動は。



プロデューサーが懐に手を入れたのを見て、ちとせの指は震えた。何度も見た、携帯電話を取り出すときの所作だ。

関係者への連絡か、即座に救急車を呼ぶのか。ならばその行先は知れている。

ここで退けば二度と舞台に立てないという確信が現実には代わり、白雪千夜に、そして黒崎ちとせに魅了されたファンたちには病に倒れた悲劇の存在としてその名を刻まれることになる。そんな未来が、黒崎ちとせの結末なのか。

既に味わい尽くしたはずの諦観が再び胸を締め付けて、力の入らない拳をしかし握り締め。

ようとした、はずなのに。

——手を

「…………え？」

ちとせの拳は、握られることがなかった。

そこには、プロデューサーの手。柔らかい布の感触。一枚のハンカチが、ちとせの掌を覆っていた。

優しく拭われたのは、吐いた血の付いた側。

べっとり赤く染めていた血はハンカチに移り、ちとせの手はいつそ血色を取り戻したかのように赤みが差すだけとなる。

証拠隠滅。共犯者。

過る言葉はそのいずれもが、普段ちとせがプロデューサーを評する「魔法使い」よりなお人の道を外れたもので。

「…………ふふ」

しかしそれでこそ、黒埼ちとせのプロデューサーには、相応しい。

胸をざわめかせていた焦燥が、そのままときめきの鼓動に変わる。

ライブの出番が迫る高揚に乗算されて、高鳴る感情を歌に乗せれば、この世の誰もを魅了させられる。そんな気がした。

——ああ。本当に、悪い魔法使いさん

そんな相手を選んでよかったと、ちとせは心から思う。

口元の血もぬぐう、とプロデューサーが言う。

嬉しい、と思わず口に出す。

そつと寄せられるハンカチに、ちとせは瞼を閉じて唇を差し出した。

まるで口付けのよう。

だがそれは呪いを解く王子様のキスではなく、悪い魔法使いとの契約だ。

左から右へ、唇をなぞる感触。

離れていくのを名残惜しく思いながら目を開ければ、そこにはあの日ちとせを見出した時と同じ、魅了されたのとは違う、しかし燃える

ような熱の宿った目があった。



黒崎ちとせが、完成した。

心の底からそう思う。

拭った唇はわずかな血が残り、メイクの紅よりなお映える。

開いた目蓋の奥の瞳と同じ色。吸い込まれそうなほどの深い赤。

夜の闇と月の光に凜と咲く、大輪の薔薇。

きつと、この日この場に黒崎ちとせを立たせるために、自分はプロデューサーとなり、ちとせと出会ったのだろう。

選択肢はいくつかあった。

ちとせをすぐに病院に連れて行くこと。

白雪千夜に知らせること。

見なかったふりをする事。

だがそれらは全て捨てたのだ。

プロデューサーとして、黒崎ちとせに魅了された第一のファンとして。

さきほどまでの弱々しさが嘘のようにまっすぐと立つその姿。

準備は整った。出番の時も来た。さあ、運命はここに整った。

——いつてらっしゃい

だから黒崎ちとせのプロデューサーは。

——最高のライブになりそうだな

と、その背を押すのだった。



「黒崎ちとせさん！　お願いします！」

「ええ」

スタッフの呼ぶ声に応えるちとせ。

ステージに向かって歩を進め。

最後に一度だけ振り向いて、プロデューサーにこれまでで一番の笑顔を見せて。

「——いつてきます」

スポットライトの光の中に、溶けていった。



黒埼ちとせというアイドルには語り草が数多い。

美貌も歌もパフォーマンスも、いずれも人の目を惹く、いやさ人智を越えた美しき。

ミステリアスな話しぶりと、同時期にデビューした白雪千夜との関係性。

そして、ファンたちは常に夢見るような目で語る、「あのライブ」。誰も詳細を語らない。

ただ、その存在がファンを魅了し、その魂にまで黒埼ちとせの名が刻まれたことだけは、確かである。